HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	山里 ― 桂離宮の原郷
著者	小野，恭平；ONO，Kyohei
引用	北海学園大学学園論集(189・190)：1-26
発行日	2023-03-27

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

山里 ── 桂離宮の原郷

小　野　恭　平

〈目　次〉

はじめに
1．山里のイメージ
2．四季の自然
3．めづらしさ
4．眺望
5．田舎遊び
6．隠遁
7．恋
8．管弦
9．山荘の建築
9－1．敷地
9－2．開放性
9－3．田舎家風
9－4．簡素
9－5．昔風
9－6．荒廃
むすび
註

は じ め に

「日本文化を代表する建築は」と問われたら，桂離宮（桂山荘）をあげる人が多いのではなかろうか。桂は藤原道長の桂山荘や『源氏物語』の桂殿のように平安時代から貴族の別荘が営まれた所で，「やまさと」（以下，山里と表記する）と呼ばれていた。山里という言葉は現代では山間にある鄙びた村里という意味で用いられているが，平安時代には東山・北山・西山といった京の郊外，あるいは宇治・須磨，ときには九州のような辺鄙な田舎をさし，またそこにある山荘を意味していた[1]。しかし単なる田舎や別荘ではなく，夥しい数の歌に詠まれ，物語や倭絵の舞台とされ，『作庭記』に「山里などのやうに面白うせんと思はば」とあるように庭園の意匠ともされた，美的な，そして特別な意味をもった場所であった。桂離宮はこの山里を原郷としている。

では山里とはどのような場所であったか。これまで山里の場所性に関しては主に国文学や思想史の分野で検討されてきた。思想史では家永三郎氏の『日本思想史に於ける宗教的自然観の展開』（斎藤書店，昭和22年）が代表的である。これは日本人にとって山里の自然が人生の痛苦を消除してくれる宗教的救済者だったことを指摘したものである。国文学の分野では西村亨氏が『王朝びとの四季』[2] で，冬の山里の淋しさに耐えている生活が王朝びとの趣味生活の理想だったことを指摘されている。また目崎徳衛氏は『歌枕と山里』[3] で平安時代の貴族たちが社会の末期的状況か

ら脱出したいという願望を抱いており，陸奥の国のような最果ての鄙に「山のあなた」的憧れを抱いていたこと，山里はその代償だったことを示されている[4]。以下はこれらの論考をふまえながら，さらに幅広く山里がどのような場所であったかを平安時代の文学作品を資料として[5]検討したものである。

1．山里のイメージ

花盛りのころ，素性法師は京の街を遠望しながら次のような歌を詠んでいる。

・見わたせば柳桜をこきまぜて宮こぞ春の錦なりける　(古今集，春上)

都の繁栄を寿いだ歌である。しかし遠目には錦のごとく見える都も，近づいてみるとまったく別の顔を見せていた。

平安京は遷都以来，繰り返し旱魃・地震・洪水・疫病・飢饉等にみまわれており，決して平安の都ではなかった。平安初期の災害だけ見ても，806年洪水，807年悪疫流行，808年洪水と悪疫流行，818年大飢饉と悪疫流行，といった惨状を繰り返している。しかし上級貴族たちは神仏・呪術に頼るばかりで為す術がなく，実務を担当する下級貴族たちも固定化した家柄社会のもとで「くれふたがった」(大鏡，第六巻) 閉塞感に鬱屈を深めるばかりだった。しかも平安時代には浄土思想の流行によって憂き世意識が強くなり，厭世的な気分が時代を覆っていた。現世に希望が持てなくなっていたのである。ちなみに「憂き世」という言葉は奈良時代までの文献には一例もなく[6]，平安時代になって急に頻出するようになった言葉である。

・散ればこそいとゞ桜はめでたけれ憂き世になにか久しかるべき　(伊勢物語，82段)

・あしひきの山のまにまに隠れなむ憂き世の中はあるかひもなし　(古今集，よみ人しらず)

人々は都，ひいては憂き世に幻滅し，彼方にある浄土への往生を切望するようになっていた。

しかし貴族たちは憂き世から遁れるもう一つの世界を，この世の，しかも京からほど遠くない場所に持っていた。それが山里であった。

・山里はもののわびしき事こそあれ世の憂きよりは住みよかりけり

(古今集，よみ人しらず)

・すみわびぬ今はかぎりと山里につま木こるべきやど求めてむ　(後撰集，業平朝臣)

「つま木こる」とは，山里での侘しい隠遁生活を意味する。

なおこの「山里」という言葉も，日本書紀・古事記・万葉集・風土記に一例も見えず，平安時代になって初めて登場する言葉である。もっとも山荘は奈良時代から既にあった。中国には古くより息苦しい役人生活から遁れるための山家・山居・山荘・山斎と呼ばれる都市郊外の別荘での隠遁生活を愉しむ風があり[7]，それが我国にも伝えられ，漢詩に詠まれたり[8]，実際に茅葺・黒木造りの「山家」が造られることもあった[9]。

しかし都が平城京から山紫水明の地である平安京に移ると，急に多くの山荘が郊外に営まれるようになり，それを和歌で詠む必要が生じてきた。ところが適当な歌語がなかった。もっとも山

荘を意味する言葉は奈良時代からあり，「タドコロ（田荘，田庄，庄）」とか「ナリドコロ（別業，田荘）」と呼ばれていた。しかしそれらは本来，農地経営のための施設であり，趣味的生活の場を指す歌語としては相応しくない。そこで漢語の山家・山荘等の訳語として「やまさと」という言葉が作られたのではないかと思われる。この言葉が初めて文献上で見られるのが，管見の範囲では，後述する藤原関雄（803 年～853 年）の歌だから 9 世紀前半頃のことであったろう。

では，この「憂き世より住みよい」と詠われた山里はどのような場所であったか。以下ではまず山里のイメージを古今集から千載集までの七勅撰和歌集（『新編　国歌大観』角川書店による）の山里の歌 81 首（「やまさと」の語が詠み込まれた歌）を資料として明らかにしておきたい。具体的には「住む人もなき山里」のように「山里」を形容する語句に注目してみる。

この種の形容語を有する歌は 29 首あり，そのうち最も多いのが次のような類である。

・訪ふ人もなき山里　（後拾遺集，上東門院中将）
・あとたえて訪ふ人もなき山里　（後拾遺集，藤原通宗）
・ふりはへて人も訪ひこぬ山里　（千載集，二条太皇太后宮肥後）
・訪ふ人もあらじと思ひし山里　（拾遺集，もとすけ）
・訪ふ人もくるれば帰る山里　（後拾遺集，素意法師）
・日も暮れぬ人も帰りぬ山里　（後拾遺集，源頼実）
・見る人もなき山里　（古今集，伊勢）
・をちこちの人めまれなる山里　（後撰集，よみ人しらず）
・すむ人もなき山里　（後拾遺集，藤原範永）
・寂しさに家出しぬべき山里　（詞花集，源道済）
・さらぬだに夕べ寂しき山里　（千載集，待賢門院堀河）
・葛の葉のうら寂しげに見ゆる山里　（後拾遺集，大中臣能宣）
・寂しさに煙をだにもたてじとて柴をりくぶる山里　（後拾遺集，和泉式部）
・われひとりながむと思ひし山里　（後拾遺集，藤原為時）

29 首のうち 14 例が山里を「訪う人もない，寂しく孤独な場所」としている。

さらに次のような例もある。

・春たてど花もにほはぬ山里　（古今集，在原棟梁）
・ひぐらしのなく山里　（古今集，よみ人しらず）
・いとどしくもの思ひまさる秋の山里　（後拾遺集，いづみしきぶ）

春になっても花が咲かず，秋になれば蜩とともに泣き暮らす傷心の場所というイメージである。

次に「冬は雪が降り積もり，春は霞に閉ざされる山里」，つまり「都から隔絶した場所」とするものが 6 例ある。

・白雪の降りてつもれる山里　（古今集，壬生忠岑）
・雪降りて道ふみまどふ山里　（後拾遺集，平兼盛）

・降りつもる雪消えがたき山里　（後拾遺集，よみ人しらず）
・雪消えぬ山里　（拾遺集，中納言朝忠）
・霞こめたる山里　（後拾遺集，上東門院中将）
・春はまづ霞にまどふ山里　（後拾遺集，選子内親王）

以上23例から，山里が都から隔絶した，寂しく悲歎的な場所と見られていたことが分かる。

このような山里のイメージは山里という言葉を初めて歌に詠んだと思われる藤原関雄（六歌仙より一世代前の人物）の歌に既に認められる。

・山里に住みにし日より訪う人も今はあらしの山ぞ侘しき　（古今和歌六帖）
・宮づかへ久しうつかうまつらで山里に籠り侍りけるに詠める ── 奥山の岩垣紅葉散りぬべし照る日の光見る時なくて　（古今集）

藤原関雄は『文徳天皇実録』に「少習属文　性好閑退　常在東山旧居　耽愛林泉　時人呼為東山進士」とあるように，薬子の変で上皇方についた真夏の男だったためか官途に恵まれず，東山に隠棲することが長かったようである。上の歌はそうした境遇から詠まれたものであろう。これ以降，都における失意や住みにくさから身を隠す孤独な場所という山里のイメージが定着したように思われる。そしてやがてここから宇治に隠れ住んだ浮舟のように恋の不如意を嘆く場所ともなっていく。山里は憂き世に「すみ侘びて身をかくすべき山里」（千載集，皇太后宮大夫俊成）であった。

一方，山里は自然美に富み，それを求めて訪う人もあった。

・梅の花垣根ににほふ山里　（後拾遺集，賀茂成助）
・卯の花に冬ごもれりと見ゆる山里　（後拾遺集，源道済）
・秋の田に紅葉散りける山里　（千載集，源俊頼）
・春きてぞ人も訪ひける山里　（拾遺集，右衛門督公任）
・としを経て通ひなれにし山里　（金葉集三奏本，源相方）

要するに山里は都から隔離された寂しく悲歎的な場所だったが，同時に，憂き世より住みよいという二面性を持った場所であった。ではなぜ山里は住みよかったのか。以下ではその一端を見てみる。

2．四季の自然

山里は場所柄，自然美に恵まれていた。以下では古今集から千載集までの7勅撰和歌集のなかで「やまさと」の語が詠み込まれた歌81首を資料として，山里ではどのような自然が注目されていたかを調べてみる。結果は次のようであった（括弧内は出現度数を示す。1度以下のものは省略した）。

春…花（8，梅2を含む），鶯（5），霞（4）…計17度
夏…卯の花（5），ほととぎす（4）…計9度

秋…月（7），鹿（6），風・嵐（6），紅葉（5），木の葉（2），荻・芒（2），ひぐらしの声（2），葛の葉（2），露（2）…計34度

冬…雪（12），煙（2）…計14度

81首の中で2度以上詠まれた自然の景物は僅か17種で，それらが74度という大部分を占めていた。このことは，貴族たちが山里で注目した自然が意外と少なく，彼らの自然観が極めて類型的だったことを示している。以下では山里の自然がどのように詠まれていたかを見てみる。

春

山里の春は霞に籠められたまま花も咲かない。だから人も訪ねて来ず，ひたすら春が待たれた。

・思ひやれ霞こめたる山里の花まつほどの春のつれづれ　（後拾遺集，上東門院中将）

・春はまづ霞にまどふ山里をたちよりてとふ人のなきかな　（後拾遺集，選子内親王）

鶯も姿をみせず，物憂げな声が幽かに聞こえるだけだった。

・春たてど花もにほはぬ山里はもの憂かるねに鶯ぞなく　（古今集，在原棟梁）

・山里も憂き世のなかを離れねば谷の鶯ねをのみぞ鳴く　（金葉集二度本，摂政左大臣）

しかしやがて鶯の声が遅い春の訪れを告げるようになる。

・ふりつもる雪消えがたき山里に春をしらする鶯の声　（後拾遺集，よみ人しらず）

・鶯の声なかりせば雪消えぬ山里いかで春を知らまし　（拾遺集，中納言朝忠）

そして花が咲けば，それをたよりに人が訪ねてくれることもあった。

・とふ人もあらじと思ひし山里に花のたよりに人め見るかな　（拾遺集，もとすけ）

・春きてぞ人もとひける山里は花こそやどのあるじなりけれ　（拾遺集，右衛門督公任）

しかし常には見る人もない花はむなしく散るばかりで，それゆえ花が咲けばいっそう人が待たれた。

・山里に散りはてぬべき花ゆゑにたれとはなくて人ぞまたるる　（後拾遺集，源道済）

・見る人もなき山里の桜花ほかの散りなん後ぞ咲かまし　（古今集，伊勢）

夏

夏には卯の花が雪のように咲いた。

・雪とのみあやまたれつつ卯の花に冬ごもれりと見ゆる山里　（後拾遺集，源道済）

・卯の花のよそ目なりけり山里の垣根ばかりにふれる白雪　（千載集，賀茂政平）

ほととぎすの声も都のように待つこともなく存分に聞くことができた。

・山里のかひもあるかなほととぎす今年ぞ待たで初音ききつる　（後拾遺集，大江嘉言）

・山里にやどらざりせばほととぎす聞く人もなきねをやなかまし　（拾遺集，よみ人しらず）

秋

〈月〉

憂き世から身を隠すために入った山里だが，澄みきった秋の月には我を忘れて見入ってしまった。

・すみわびて身を隠すべき山里にあまりくまなき夜はの月かな（千載集，皇太后宮大夫俊成）

・寂しさに家出しぬべき山里にこよひの月に思ひとまりぬ　（詞花集，源道済）

月は孤独な山里に住む（澄む）唯一の友だった。

・われひとりながむと思ひし山里に思ふことなき月もすみけり　（後拾遺集，ふじわら為時）

・とふ人もくるれば帰る山里にもろともにすむ秋の夜の月　（後拾遺集，素意法師）

〈紅葉・露〉

山里では紅葉の美しさも格別だった。

・見わたせば紅葉しにけり山里にねたくぞけふはひとりきにけり　（後拾遺集，源道済）

・山里の紅葉見にとや思ふらむ散りはててこそ訪ふべかりけれ　（後拾遺集，前大納言公任）

とりわけ秋の田に散る紅葉，稲田の上に昇る月は山里ならではの絶景であった。

・秋の田に紅葉散りける山里をこともおろかに思ひけるかな　（千載集，源俊頼）

・山里の門田の稲のほのぼのとあくるもしらず月を見るかな

（金葉集，二度本，中納言顕隆）

しかし山里の秋はもの悲しく，涙の露で染まる紅葉が袖を濡らした。

・紅葉散るころなりけりな山里のことぞともなく袖のぬるるは　（後拾遺集，清原元輔）

・公実卿中将にてはべりける時，人々ぐして小野のわたりに紅葉見ありきけるに，おくりてはべりける ── 山里の秋のけしきも見ぬ人に来てだに語れつゆもおとさず

（金葉集三奏本，前皇后宮美作）

山里ではまた荻や芒が人を招くかのように秋（飽き）風に揺れ，葛の葉が男の心変わりを恨むかのごとく葉裏を見せて乱れ，木の葉（言のは）が嵐（有らじ）と散っていた。

〈荻・芒〉

・山里のもの寂しさは荻の葉のなびくごとにぞ思ひやらるる　（後撰集，左大臣）

・あききぬと風もつげてし山里になほほのめかす花芒かな　（千載集，法印静賢）

〈葛の葉〉

・を鹿ふすしげみにはへる葛の葉のうら寂しげにみゆる山里　（後拾遺集，大中臣能宣）

・おのづからあきはきにけり山里の葛はひかかる槙の伏せ屋に（金葉集二度本，大納言経信）

〈木の葉〉

・山里はゆききの道の見えぬまであきの木の葉にうづもれにけり　（詞花集，曽禰好忠）

・神な月ねざめにきけば山里のあらしの声は木の葉なりけり　（後拾遺集，能因法師）

また夕暮れに鳴く「ひぐらし」の声や妻恋に鳴く鹿の音は人恋しさに泣く自分自身の声のようであったし，嵐の音が夜通し荒々しく訪れるだけだった。

〈ひぐらしの声〉

・ひぐらしのなく山里の夕暮れは風よりほかに訪う人もなし　（古今集，よみ人しらず）

・山里は寂しかりけりこがらしの吹く夕暮れのひぐらしの声　（千載集，藤原仲実）

〈鹿の声〉

・山里は秋こそことにわびしけれ鹿のなくねに目を覚ましつつ　（古今集，ただみね）

・さらぬだに夕べ寂しき山里の霧の籬にを鹿なくなり　（千載集，待賢門院堀河）

〈風・嵐〉

・日も暮れぬ人も帰りぬ山里は岑の嵐のおとばかりして　（後拾遺集，源頼実）

・山里のしづの松垣ひまを粗みいたくな吹きそこがらしの風　（後拾遺集，大宮越前）

冬

〈雪〉

冬の山里は降り積もる雪が都との往き来の道を閉ざし，友とする竹も埋め尽くし，寂寞そのものの世界となった。

・山里の垣根は雪にうづもれて野べとひとつになりにけるかな

（千載集，右のおほいまうちぎみ）

・ふる雪に軒ばの竹もうづもれて友こそなけれ冬の山里　（千載集，よみ人しらず）

そして時折，柴を折りくべる煙だけが心細く空に立ちのぼっていた。

・山里の柴をりをりにたつ煙人まれなりと空にしるかな　（千載集，二条太皇太后肥後）

・寂しさに煙をだにもたてじとて柴をりくぶる冬の山里　（後拾遺集，和泉式部）

山里の冬はいつまでも雪に閉ざされたまま，ひたすら春が待たれ，人が待たれた。

・雪ふりて道ふみまどふ山里にいかにしてかは春の來つらむ　（後拾遺集，平兼盛）

・春やくる人やとふとも待たれけりけさ山里の雪をながめて　（後拾遺集，赤染衛門）

このように見てくると，山里の歌で詠まれた自然はそのほとんどが寂しさを痛感させる自然だったことが分かる。ではなぜそのような自然が注目されたのか。

西村享氏は「王朝びとは『罪なくして配所の月を見む』ということばがあるように，淋しい生活，淋しさに耐えている生活にひとつの趣味生活の理想を感じている」と述べている[10)]。確かに寂しさには或る種の情趣，自らが自らを慰める感傷がある。しかしそれだけで配所に流されたいと思ったわけではなかろう。そこに澄みきった月があり，それを痛切な寂しさの中で眺める自分自身がいたからであろう。平安貴族は美しいもの・か弱いもの・高貴なものが不当な環境に堪えている姿に最も深く心を動かされ，その感動を「あはれ」と呼んでいた。だから彼らが山里の花や紅葉を詠んだのも，単にその美に感動したからというだけでなく，寂しさに堪えている花や紅葉あるいは自分自身に「あはれ」を覚えたからであろう。山里はそうした美的空間であり，「あはれ」のために設けられた疑似的「配所」だったといえる[11)]。

3．めづらしさ

歌に詠まれた山里の自然は種類が少数で風景も類型的だったが，室内生活を専らとする都の貴

族にとって，絵や歌の中の自然ではなく本物の自然に接することは極めて興趣あることだった。清少納言は賀茂へ出かけた時の興奮を次のように記している。

・五月ばかりなどに山里にありく，いとをかし。草葉も水もいとあおく見えわたりたるに，上はつれなくて，草生ひ茂りたるを，なかながとたゞざまに行けば，下はえならざりける水の，深くはあらねど，人などのあゆむに走りあがりたる，いとをかし。左右にある垣にあるものの枝などの，車の屋形などにさし入るを，いそぎてとらへて折らんとするほどに，ふと過ぎてはづれたるこそ，いとくちをしけれ。蓬の，車におしひしがれたりけるが，輪の廻りたるに，近ううちかかりたるもをかし。　(枕草子，206段)

久々の梅雨の晴れ間に出かけたのであろう，窮屈な仕来たりに縛られた宮廷や陰気で黴臭い室内から明るく広々とした自然の中に出た感動が「をかし」の繰り返しによって伝わってくる。

「をかし」かったのは，「めづらし」かったからでもある。

・二十日の月，遥かに澄みて，海の面，おも白く見えわたるに，霜のいとこちたく置きて，松原も色まがひて，よろづの事そゞろ寒く，おもしろさもあはれさもたち添ひたり（中略）御門より外の物見，をさをさし給はねば，めづらしく，をかしくおぼさる。

(源氏物語，若菜)

・はるばると霞みわたれる空に，散る桜あれば今は開けそむるなど，色々見わたさるゝに，川ぞひ柳の起き臥しなびく水影など，おろかならずをかしきを，見ならひ給はぬ人は，いとめづらしく見捨てがたしとおぼさる　(源氏物語，椎本)

「めづらし」とは，見慣れないものを見聞きしたときに感じる新鮮な驚き[12]と讃美の気持ち[13]をいう。前の例は紫の上が初めて住吉を訪れ，月光に白々と照らされた海面や，緑の松原に置く霜の風景を見て「めづらしく，をかしく」思った例。後の例は匂宮が春たけなわの宇治を訪れ，山の桜と川辺の柳が織りなす景色に「めづらしく，見捨てがたし」と感嘆した例である。いずれも京では見ることができない絵のような風景に「めづらし」と魅了されている。

山里が「めづらし」かったのは，一つにはそこに都とは異質な時間が流れていたからであった。

・三月のつごもりなれば，京の花盛りはみな過ぎにけり。山の桜はまだ盛りにて，入りもておはするまゝに，霞のたゝずまひもをかしう見ゆれば，かゝるありさまもならひ給はず，所狭き御身にて，めづらしうおぼされけり　(源氏物語，若紫)

・七月ばかりになりにけり。都にはまだ入りたゝぬ秋のけしきを，音羽の山近く，風の音もいと冷やかに，槙の山辺もわづかに色づきて，猶たづね来たるに，をかしうめづらしうおぼゆるを　(源氏物語，椎本)

前者は，京ではもう春も終わるのに，山深く入っていくにつれ，霞がたなびき，桜が咲き誇るという北山の眺め。後者は，都ではまだ秋とも言えぬ頃なのに，早くも冷やかな風が吹き，木の葉が色づく宇治の風景である。山里は景観的にも時間的にも都とは異質なところがめづらしかったのである。

それゆえ貴族たちは山里のめづらしさに魅了され，京へ帰るのも忘れたという。

・山里の花のにほひをたずねつつ春は都の屋戸も忘れぬ　（風情集，公重）

・卯の花に咲きこめられて山里に恋し都も忘られにけり　（道済集）

・人わるくつれづれに思さるれば，秋の野も見たまひがてら雲林院に参うで給へり。（中略）紅葉やうやう色づきわたりて，秋の野の，いとなまめきたるなど見給ひて，故郷も忘れぬべく思さる。　（源氏物語，賢木）

しかもこうした自然と接していると，憂き世さえ忘れてしまうともいう。

・右大将，桂におもしろき所に，大いなる殿作りて，花盛，紅葉盛などにものし給ひて，心やり給ふ。花の盛りなれば，日頃，仲忠の母北の方を率ておはして，心やり遊び給ふ。「あやしく世の中忘れられ，心ゆく所にこそありけれ。この春夏こゝに過ぐさん」とて，ものし給ふに，花の色をつくして咲きまじり，水は絲の乱れたるやうに流れ入りて，いと面白し。　（宇津保物語，梅の花笠）

「心やる」とは気晴らしをすること・憂さを晴らすこと，「心ゆく」とは心が満たされることである。さまざまな花が咲きまじり，清らかな水が糸を引くように流れる山荘で遊んでいると心が満たされ，憂き世のことなど忘れてしまうというのである。

『蜻蛉日記』の作者も，気晴らしに賀茂へ出かけた時，次のように述べている。

・いつもめづらしき心ちする所なれば，今日も心のばはる心ちす。　（蜻蛉日記，天禄三年）

「心のばはる」とは，心が伸びやかになることである。日頃の怒りや悲しみに凝り固まった心がめづらしいものを見て解きほぐされ，伸びやかになったのであろう。つぎの例も病身の源氏が北山を訪れ，聖から加持を受けた翌朝，立ち籠める春霞の中を逍遥するうちに悩ましさから解放される場面である。

・明け行く空はいといたう霞みて，山の鳥ども，そこはかとなうさへづりあひたり。名も知らぬ木草の花ども色々に散りまじり，錦をしけると見ゆるに，鹿のたゝずみありくもめづらしく見給ふに，なやましさも紛れはてぬ。　（源氏物語，若紫）

山鳥があちこちでさえずり，名も知らぬ花々が錦を広げたように咲き乱れ，鹿がたたずみ歩く。源氏はこうした現実とも思えない絵のような風景の中を逍遥しているうちに悩ましさも何処かへ消え去ってしまったという。

山里はその本物の自然や見慣れない風景が新鮮な驚きを与え，魅了し，心を満たし，世の憂さから解放してくれる場所であった。

4．眺　　望

ベルツによれば日本人は眺望を好まない民族だという[14]。例えば山荘を造る場合でも，欧米人は見晴らしを重視するが，日本人は山裾に籠るほうを好むという[15]。

しかし貴族たちの山荘の多くは「山に片懸けて」とか「峰に片懸けて」と表現されているよう

に，傾斜地に建てられるのが典型的な造り方だった。すなわち柱が斜面に立ち，床が空間に張り出す懸け造りであった。

・山の片添えに山荘の様に造りたる所有り　（今昔物語，巻27）

・かの夕霧の宮す所のおはせし山里よりは，今すこし入りて，山に片懸けたる家なれば　（源氏物語，手習，小野の尼の山荘）

だから眺めはよかった。

・東は，野のはるばるとあるに，ひむがしの山ぎはは，比叡の山よりして，稲荷などいふ山まであらはに見えわたり，南は，双の丘の松風，いと耳近う心細く聞こえて，内には，いたゞきのもとまで，田といふものの，引板ひき鳴らす音など，ゐ中の心地していとをかしきに，月のあかき夜などはいとおもしろきを，ながめあかし暮らすに　（更級日記）

・端の方に立出でて見れば，遥かなる軒端より，狩衣姿色々に立ちまじりて見ゆ　（源氏物語，手習）

『更級日記』の一節は，作者が一時住んだことのある西山の山荘からの眺めで，東方を見れば遥々と野が広がり，比叡山から稲荷山まで見渡せ，南は双が岡で，松籟が物寂しげに聞こえ，西には山田が続き，引板の音が聞こえるという，まるで昔住んでいた東国の田舎のようで，月が明るい夜などは見飽きることがなかったという。一方，『源氏物語』の一節は，「遥かなる」が係る部分が省略されているため意味が不明確だが，「端のかた」つまり簀の子縁の辺りに立つと，軒端の遥か彼方に山路を登ってくる狩衣姿の一行が見えるというのであろう。いずれの例からも高い視点から見晴らしがきく造りになっていたことが分かる。なお山荘は川べりにある場合でも広々とした眺望が得られる場所に建てられていた。明石の君が上京後に住んだ大井の山荘が「年ごろ経つる海面におぼえたる」（源氏物語，薄雲）とあるように，大井川が広々と見渡せたし，薫が新築した宇治の山荘も，柴積み舟が行きかう様や宇治橋が「はるばると見渡さるる」場所に建てられていた（源氏物語，浮舟）。

眺望は庭園でも重視されていた。『今鏡』（藤波の上）に『作庭記』の作者とされる橘俊綱と白河院の次のようなエピソードが記されている。

俊綱と院が，何処の庭園がもっとも興趣があるか，と論じあっていた時のことである。院は石田殿（琵琶湖の眺望に優れていた），高陽院（二町四方を占める広大な頼通邸の庭園で，『栄花物語』によれば「絵などよりは見所あり，おもしろく」と評されていた）と挙げていき，次いで自身の鳥羽殿を挙げた。しかし俊綱は，鳥羽殿は「地形眺望など，いと無き所なり」として退け，かわって自身の伏見の山荘を挙げたという。鳥羽殿には広大な水面はあったが，眺望が平坦だというのである。その点，伏見の山荘は高い所にあったから変化のある田園風景を見晴らすことができたようで，後世の記録だが『増鏡』に次のように記されている[16]。

・野山のけしき色づきわたるに，伏見山，田の面につゞく宇治川の川浪，はるばると見渡されたるほど，いと艶あるを，若き人々など，身にしむばかり思へり　（増鏡，老いのなみ）

野山は一面に紅葉し，黄金色の稲田が広がり，その中を宇治川が青く流れているのが見渡され，「いと艶ある」という。色彩豊かな絵のようで，若い人たちは身に沁むほど感動したという。

では眺望の魅力とは何であったか。

先の『源氏物語』の小野の山荘の女たちは中将一行が山路を登ってくるのを簀の子まで出て見ている。こうした大胆な行動ができたのは，周りが木立に囲われ，木々の間から向こうは見えるが，向こうからはこちらが見えなかったからであろう。このような地形は，J. アップルトンによれば，K. ロレンツの言う「敵に見られないで敵を見ることができる」地形で，動物行動学的には最も有利な地形だという[17]。そしてそれゆえに安心感を覚え，さらにはそこから快適さや美が感じられるようになったという。平安貴族が眺望にひかれたのも，このような理由によろう。

一方，広々とした眺めには心が伸び広がって晴れやかになるという魅力もあった。『蜻蛉日記』の作者は次のような体験を記している。

・賀茂に詣づ。「しのびてもろともに」と言ふ人あれば，「なにかは」とて詣でたり。いつもめづらしき心ちするところなれば，今日も心のばはる心ちす。田かへしなどするも，かう強ひけるはと見ゆ。（蜻蛉日記，天禄三年）

作者は兼家との結婚生活に鬱々とした日々を送っており，時折そうした気鬱や怒りの感情から遁れるように物詣に出かける。この時も思いつめた日々から脱すべく出かけたのであるが，広々とした田園風景を見て「心のばふる（心が伸び広がる）」のを感じている。そしてそのため心に余裕が生まれたからであろう，いつもなら気にもかけない山賤の生活にも目が届き，こんなにも苦労しているのだな，と共感を寄せている。

作者は以前にも「心をのべがてら」唐崎に出かけている。わずかな供人だけを従え，暗いうちに京を発ち，鴨川を渡り，逢坂の関を越え，ようやく琵琶湖が見えてきた時の感動を次のように記している。

・関の山路，あはれあはれと覚えて，行く先を見やりたれば，ゆくゑも知らず見えわたりて，鳥の二つ三つゐたると見ゆるものを，しゐて思へば釣舟なるべし。そこにてぞ，え涙はとゞめずなりぬる。いふかひなき心だにかく思へば，ましてこと人はあはれと泣くなり。はしなきまで覚ゆれば，目も見合わせられず（蜻蛉日記，天禄元年六月）

木々が鬱蒼と茂る暗い山路を登りきって前方を見ると，遥か彼方まで湖面が広がり，そこに水鳥が二，三羽浮かんでいる，と見ると，それは小さな釣舟だった。そのとき突然，とめどもなく涙があふれてきた。暗く閉ざされた心が明るく広大な風景に一気に開放され，これまで圧し込めていた悲しみが堰を切ったようにあふれ出したのであろう。

平安貴族にとって山里の眺望は，その広々とした開放感が都の「くれふたがった」心を解放し晴れやかにしてくれる救済的な場所であった。

5．田舎遊び

『枕草子』(112段)は「(絵)に描きまさるもの」として，松の木・秋の野・山道とともに山里をあげている。絵を見ると美しく見えるが，実際に住んでみると，むさくるしく，不快な所でしかない，というのである。『源氏物語』(蓬生)にも「ゐ中などはむつかしきもの」とある。

しかし変化に乏しい日常を繰り返す都の貴族にとって，山里の若菜摘みや小松引き，紅葉狩りや野外炊飯などには心が浮き立つような喜びがあった。

・春立ちて子の日になればうちむれていずれの人か野辺に来ざらん　(貫之集)

・春日野の若菜摘みにや白妙の袖ふりはへて人の行くらむ　(貫之集)

・紅葉の林に御座敷きて皆ゐ給ひぬ。(中略)山の法師ばら，童部出して，をかしき枯木拾はせて，御前に銀の鋺など取りいでて，お物炊がせ，お前の朽木に生ひたる茸ども羹物にさせ，苦竹など調じて，銀の金椀に入れつゝ参れば，君達興じつゝめしそへつゝ参れり。

(宇津保物語，国譲・下)

山里では鷹狩りや鵜飼漁も楽しまれたが，上の『宇津保物語』のように，田舎ならではの食事も興趣ある楽しみだった。源氏は謫居中の須磨まで訪ねて来てくれた中将を「ことさら所につけ」た食事でもてなしているし，『枕草子』95段に登場する高階明順も，山荘を訪ねてきた清少納言たちを「手づから」摘んだ蕨で歓待している。

山菜や川魚を都の知人に送ることも山里らしい遊びであった。

・鮎一籠，鮠一籠，石斑魚，小鮒入れさせ，荒巻など添へさせて，藤壺の若宮の御許に，手づから，往来月日書きて，せむ立てゝ，御名し給へり。

(宇津保物語，国譲，仲忠から若宮へ)

・御寺のかたはら近き林に抜き出でたる筍，そのわたりの山に掘れるところなどの，山里につけてあはれなれば，たてまつれ給とて，御文こまやかなる端に，春の野山，霞もたどたどしけれど，心ざし深く掘り出でさせて侍るしるしばかりになむ。

(源氏物語，横笛，朱雀院から女三宮へ)

この他，田植えや稲刈りなどの農作業を見ることも興趣ある遊びだった。『枕草子』95段には清少納言たちが高階明順の山荘で稲こぎの様子を見たり作業歌を聞いて興じあったことが次のように記されている。

・所につけては，かゝることをなむ見るべきとて，稲といふ物とり出て，わかき下衆どもの，きたなげならぬ，そのわたりの家の娘などひきもて来て，五六人してこかせ，又見もしらぬくるべき物，二人してひかせて，歌うたはせなどするを，めづらしくて笑ふ。

(枕草子，95段)

また209段では農家の女たちが歌を唄いながら田植えをする様を見て「をかし」と言い，「せまほしげに見ゆる」と述べている。実際に農作業の真似事をすることもあったようで，『小侍従集』

には宮中の女房たちが門田の鳴子を引いて遊んだことが次のように記されている。

・中将隆房，八条の家に内の女房あまた見にゆきたるに，門田のおもしろくて鳴子かけなどしたり。見遊びて立ちかへり，これより ── ほの見つる門田の稲に綱はへてしかいとはずばまたもゆかばや　（太皇太后宮侍従集）

一方，山賤を演じることも山里らしい遊びであった。例えば源氏は流謫先の須磨では調度，碁・双六の盤などまで，ことさら「田舎わざ」にし，衣装も「ゆるし色の黄がちなるに，鈍の狩衣，指貫，うちやつれて，ことさらに田舎びもてなし」（須磨）ていた。これは落ちぶれた姿というよりカイヨワの言う「ミミクリー（ごっこ遊び，変身遊び）」である[18]。だから天皇の御子である貴人が田舎びた格好をしていても，それがかえって微笑ましく，「いみじう見るに笑まれて清らなり」と言われている。「清ら」とは本来の高貴さが滲み出る最高級の美しさである。山賤を演じることは「やつし」に通じる美意識であり，遊びであった。そしてそれが遠路訪ねてくれた親友に対するユーモアを交えたもてなしでもあった。

山里は，川魚漁や山菜とりといった自然と触れ合ったり，農作業の真似事をしたり，山里ならではの料理を愉しんだりといった遊びの他，山賤として振るまうミミクリーの遊びなど，都とは異質な別世界に遊ぶことができる場所であった。

6．隠　　遁

山里は憂き世から隔絶した脱俗境であった。

・玆地幽閑人事少　（凌雲集，秋日於友人山荘，桑原公腹）

・茅屋幽閑無客至　爰知此地避郷塵　（本朝無題詩，余春洛外別業即事，法性寺入道殿下）

そこでは花月を愛で，詩を賦し，琴・酒を愉しみ，また或る時は釣り糸を垂れ，荘子の一篇を読み，友あれば碁盤を囲む悠々自適の別世界であった。

・閣は月を浮かぶるに依りて旁に水に臨み　窓は花を愛するが為に近く山に向かふ（中略）詩を吟じ　酒を酌み　好んで遊ぶ処　餘興未だ彈きずして　自から還ることを忘れたり（本朝無題詩[19]，山家秋歌，紀長谷雄）

・山家の秋の暮は意如何　物に触れては感懐日を逐ひて多し　處處に詩を賦しては閑かに諷詠し　時時に酔ひに扶けられては獨り狂歌す　（本朝無題詩，秋日山居即事，三宮）

・忘老至　計身安　乗閑空把一魚竿　（本朝文水粋，山家晩秋，紀納言）

・此夕無他業　荘周第一篇　（菅家文草，灘聲，菅原道真）

・數局の囲碁　坐隠を招く　三分の浅酌　忘憂を飲む　（菅家文草，山家晩秋，菅原道真）

そしてそこでは粗末な茅葺の家に住みながら生計の乏しさを厭わず，酒食はほどほどで満足し，雲のように自由で満ち足りた境地に遊ぶことができた。

・道ふこと莫かれ幽棲の生計乏しきを　灌園は自らに年を送る媒と作れり（本朝無題詩，山家春意，藤原周光）

・生計は先ず雲外に忘れ　春愁は遠く日の西する天に送りたり

（本朝無題詩，春日山家眺望，藤原周光）

・東は棲霞観　西は雄蔵山。中に茅茨　松柱三間有り。（中略）食は飽くことに取りて　滋味を求むること勿れ。酒は憂を忘るることに取りて　痛く酔うふことを要めざれ。且く乃が懐を述べ　各爾が志を言へ。秋の燈は夜の深くるまで話すことを許し　春の枕は日の高くなるまで睡るに任す。或は坐　或は行き　黒きを衝き　明きに徹る。山雲厭はず　澗水情無し。優なる哉　遊なる矣。聊かに吾が残生を送らむ。（本朝文粋，山亭起請，前中書王）

・塢塞の上　亀山の傍。柴扉の門　竹編の墻。松に蓋有り　石に床有り。（中略）　詩は両韻琴は一張。其の包めるは何ぞ　橘の霜に飽ける。彼の摘めるは何ぞ　葵の陽に向かへる。薇一篋　笋一筐。 膾一筋　酒一觴。臥しては睡り　起きては彷徨ふ。荷露の気　桂風の香。王湛よりも癡れ　嵇康よりも慵し。行楽に任せ　坐忘に入る。心自得し　壽無窮なり。（本朝文粋，遠久良養生方，前中書王）

一方，こうした山里に閑居する友を訪ねることも風流なこととされていた。特に，雪に閉ざされ孤絶した山里を見舞うことは，誠意ある友情の証として繰り返し絵に描かれていた。

・左京大夫みちまさの七条のいえの障子の絵に，雪いみじう降りたるに，客人の前に来て，馬より下りたてるところ ── 雪ふかき道にてしりぬ山里はわれより先に人こざりけり

（経衡集）

・雪ふりたる山家たつぬる所 ── 道もなく雪ふりにけり山里はたゞ山ひこのこたへのみして

（道済集）

だから迎える側も，雪に埋もれて人もいない，といった風情を見せることが山里らしいもてなしとなっていた。『今鑑』（藤波の上）に次のようなエピソードが紹介されている。

京には珍しく大雪が降った朝のことである。師実（頼通の三男）は急に俊綱（師実の実弟）の山荘へ出かけることにした。雪中訪友の風流を実践しようとしたのであろう。日頃から山荘自慢を聞かされていたから，急な訪問にどんなもてなし方をするか，その慌てぶりも見てみようという魂胆もあったであろう。訪ねてみると，案の定と言うべきか，門は閉ざされたまま人の気配もせず，ひっそりと静まりかえっていた。せっかく雪の中を訪ねて来たのに，と興ざめだったが，やっと家人が門を開けにきた。なぜすぐに門を開けに来なかったのかと責めると，雪に踏み跡を付けないように山の方を遠回りして来ましたので，と言う。そこで師実は俊綱の心遣いに感動したという。

ところで漢詩では脱俗閑居の隠遁生活が大量に詠まれ，『源氏物語』でも源氏が須磨の家を「石階松柱竹編墻」という「いはむ方なく唐めき」たる造りにし，白居易を意識しながら「から国に名を残したる人よりも行くへ知られぬ家居をやせむ」（須磨）と隠遁生活を詠んでいるが，現実には我国には中国のような本格的な隠遁を実践した者はいなかった[20]。多くは「世務の余閑に草堂を排き　琴を鳴らし　榻を置き　酒を觴に盈たせり」（本朝無題詩，夏日桂別業即事，藤原敦光）

のように，役所勤めのかたわらに山里へ出かけ，一時の隠遁気分を味わうのが関の山だった。こうした遊びが愉しまれた例は『枕草子』95段にも見られる。先に見た高階明順は山荘を訪ねてきた清少納言たちに手づから摘んだ蕨を中国風の懸盤に並べてすすめているが，これは首陽山の蕨で飢えをしのいだ伯夷・叔斉を演じたもので，清少納言たちはその隠遁遊びに参加させられたわけである。山里は都という憂き世から隔絶した隠遁遊びの恰好の場所であった。

7．　恋

山里は恋の舞台でもあった。『源氏物語』では嵯峨・北山・大井・宇治などがその例であるし，屏風絵にも山里の恋が繰り返し描かれていた。そこには一つの型があった。

・梅の花見るたよりに，もの言ひそめたる女に男 ── 見し人にまたもやあふと梅の花咲きしあたりにゆかぬ日ぞなき　（伊勢集）

・山里に水あるところに客人のきたり ── この宿にわれをとめなむ沢水に深き心のすみわたるべく　（能宣集）

・雪ふりたるところに女のながめしたるところ ── 春やくる人やくるともまたれけりけさ山里の雪をながめて　（赤染衛門集）

一首目は花見に出かけた時に垣間見た女性に再び会えるかと木の下に佇む貴公子を描いたもの。山荘に咲く梅の花を垣根の内と外で男女が眺め合う構図だったであろう。二首目は涼しげな清水が一筋流れ，こちら側に立つ男から対岸の女性に歌を詠みかけたもの。川は天の川に見立てられたものであろう。三首目は道も見えないほど降り積もる雪を女が眺めやる場面。男の訪れが絶えた恋の終りを描いたものである。山里を舞台とする恋物語は常にこのような垣間見から別れという経過をたどっている。以下ではこれをもう少し詳しく見てみる。

都では深窓の姫君が男性の視線にさらされることは厳しく禁じられたが，山里では花や月を眺めるために端近な場所に出ることもあり，恋の端緒となる垣間見が可能だった。

・山里なる家に，梅の花見る女ども侍りて，男かいまみし侍る ── わがやどの梅はときはに匂はなんひとめこひしと思はざるべく　（恵慶集）

また山里のように京から離れた鄙にこそ，かえって佳人はいるとされ，そうした出会いこそ運命的な出会いのように思われていた。

・うち隠ろへつゝ，（佳人は）おほかめるかな。さるかたに見所ありぬべき女の，もの思はしき，うち忍びたる住みかも，山里めいたる隈などに，おのづから侍るべかめり　（源氏物語，橋姫）

・やむごとなからずとも，父母もそはず，思ひもかけぬ山里，蓬，葎のなかに，かたち，ありさま，をかしからむ人を見いでては，そは品ほどをたづねえらるべきに侍らず，いみじう心ぐるしうあはれに，さまことに思ひ侍りぬべし。　（夜の寝覚，巻一）

じっさい山里は単に田舎というだけでなく，空間的にも時間的にも異境的なところがあったから，

そこでの出会いにもどこか物語めいたところがあった。『源氏物語』では北山での出会いがそうであった。北山は京に近いが，九十九折りの山道を越えて奥深く入って行くにつれ，霞が棚引きはじめ,京では既に散ってしまった桜が咲き誇っているという異境的な雰囲気の場所であったが,源氏はここで女主人公の紫の君と出会っている。また明石も，そこは流罪の地であった須磨よりさらに遠い辺境の地で，しかも源氏がすさまじい暴風雨と落雷・火災という受難を経て辿りついた明るく穏やかな世界であり，まさしく異境訪問譚の条件を備えていたが，ここでも源氏はもう一人の女主人公である明石の君と運命的な出会いをしている。

山里は物語のような出会いの場所として最適だったが,多くの場合,その恋は人目を忍ぶ恋だった。だから男は女を山里に隠したまま密かに通うことになった。『更級日記』の作者が少女時代に憧れていたのもこのような恋であった。

・浮舟の女君のやうに，山里にかくしすへられて，花，紅葉，月，雪をながめて，いと心ぼそげにて，めでたからむ御文などを時々まち見などこそせめとばかり思ひつゞけ，あらまし事にもおぼへけり　(更級日記)

ところが秋（飽き）とともに男の訪れは間遠になり，冬にはついに途絶えてしまう。だから山里は結婚生活・恋愛生活の不如意にある者が住む場所ともされていた[21]。

・心ほそげなる山里に女のながめたるを人の見れば ── この葉散りさびしさまさる山里におとなふものは峯のまつ風　(源兼澄集)

・山里なる女，鹿の音を聞きて ── つまこふとしか鳴く時になりにけりわがひとりねをたれに聞かせむ　(たゝみ集)

・山里なる女の，つらつえをつきて人待つかた描き侍りしところに ── すみしれる月と見つるにことはん人待つ宵のあきの山里　(源兼澄集)

しかしこうした悲劇的な恋が貴族たちの好尚に適っていた。例えば『落窪物語』の中で「十二月，山に雪いと高く降れる家に，女ながめてゐたり」という屏風絵の画面に「雪深く積もりて後は山里にふりはへて來る人のなきかな」という傷心の歌が書かれていたが，この屏風は実は女主人公の父の七十賀の祝いのために製作されたものであった。佳人が山里の寂しさに堪える姿は「あはれ」深い美的な情景だったのである。

さて現実には，女性たちはこうした恋より清少納言が「ゑせ幸い」(枕草子，21段）と軽蔑した，親に従うだけの平凡な結婚を望んでいた。また男たちの結婚相手の選び方も現実的・打算的なものだった。『宇津保物語』にも

・今の世の男は，先ず人（妻）を得んとては「ともかくも，父母はありや，家所は有りや。洗はひ，綻びはしつべしや。共の人に物はくれ，馬，牛は飼ひてんや」と問ひ聞き，容貌清らにて，貴にらうらうしき人といへども，荒れたる所に，かすかなる住まひなどして，さうざうしげ（貧しげ）なるを見ては，『あな，むくつけ。我が労き煩ひとならん』と思ひ惑ひて，あたりの土をだに踏まず　(宇津保物語)

とある。物語は束の間でもこのような味気ない現実を忘れさせてくれる虚構であり，恋の代償だったのであろう。もっとも実際に山里を訪ねてみれば，その寂しげな空気は人を現実から隔て，隠遁遊びと同じように恋物語の世界に浸ることを可能にしてくれた。だから例えば山里と都の間で歌の贈答をする場合でも，物語の中の主人公になったつもりで寂しさを訴えたり見舞ったりという模擬の遊び（ミミクリー）を愉しむことができた。山里の歌の圧倒的多数を占める寂しさを詠んだ歌は，実はこうした恋を演じて遊んだものだったのではないかと思われる。山里は平凡で退屈な現実から物語の世界へとトリップ（trip）させてくれる舞台装置だったといえる。

8．管　　弦

山里では野外の宴も愉しまれた。

・今日は猶，桂殿にとて，そなたざまにおはしましぬ。にはかなる御あるじとさわぎて，鵜飼ども召したるに，海人のさへづり思し出でらる。野に泊りぬる公達，小鳥しるしばかり引きつけさせたる荻の枝など苞にして参れり。大御酒あまたゝびずむ流れて，川のわたりあやふげなれば（「なれど」か[22]），酔ひにまぎれておはしまし暮らしつ。をのをの絶句など作りわたして，月はなやかにさし出づるほどに，大御遊び始まりて，いと今めかし。弾物，琵琶，和琴ばかり，笛ども上手のかぎりして，折にあひたる調子吹きたつるほど，川風ふきあはせておもしろきに，月高くさしあがり，よろづの事澄める夜の，やゝ更くる程に，殿上人四五人ばかり連れてまいれり。（源氏物語，松風，桂の山里）

この場所は鵜飼どもの声が聞こえているから川辺であろう。山荘は川遊びのために水辺に造られるものも多かった。例えば『蜻蛉日記』の作者が天禄二年夏に訪れた藤原師氏の山荘が，鵜飼漁がよく見える川辺に建てられていたし，『源氏物語』の八の宮の宇治の山荘の場合には川舟から直接廊へ上がれるようになっていたというから，川に張り出した造りになっていたのであろう。源氏の桂殿もおそらく川辺の一帯がそのまま庭になるような造りになっていたと思われる。

野外の宴では管弦の遊びが最も興趣あるものだった。特に月の出とともに始まる楽の音は山里の静寂の中でひときわ趣深く，風の音，水の音と響きあい，澄みまさって聞こえた。

・所がらに，ものの音まさりて，おもしろう聞こゆる事かぎりなし。

（夜の寝覚，巻五，亀山の山荘）

・かう世離れたる所は，水の音ももてはやして，物の音澄みまさる心地して

（源氏物語，椎本，夕霧の山荘）

しかも楽の音は夜とともに神秘性を深めた。清少納言も「あそびは夜。人の顔見えぬほど」がよい（枕草子，200段）と言っている。暗さの中で視覚が制限されると，聴覚が敏感になるだけでなく想像力が解放され，楽の音に身を任せているうちに不思議な世界へ連れ出してくれたからであろう。

『夜の寝覚』の作者は十三歳の時，忘れ難い体験をしている。父の任地であった東国から京に帰

る途中のことである。一行は足柄山で野宿することになった。辺りは「いとおそろしげ」に樹々が生い茂り，月のない夜だったので漆黒の闇がひろがっていた。そこへ何処からともなく三人の女が現れた。松明の灯りを近づけてみると，色白く，ひたい髪の美しい遊女だった。女たちは夜空に澄み昇るような声で歌った後，再び闇の中へと消えていった。作者がこの夜の遊びをいつまでも覚えていたのは,それが異界と言ってもよい別世界をかいま見せてくれたからであったろう。『狭衣物語』には夜の音楽が想像力を解き放ち，幻想的な世界が現れる場面が描かれている。主人公の狭衣が笛を吹くと空の様子が一変し，星の光が月のように輝きわたり，稲妻が走り，紫の雲に乗った天人が天下って来たという。

遊びとは「日常的な生活から別世界に心身を解放し，その中で熱中もしくは陶酔すること」(岩波　古語辞典)，または「日常生活とは異なる非日常的空間あるいは時間，いわば異界に歩み入ること」とされている[23]。したがって夜の管弦は最も遊びらしい遊びであり，現実から異界へとトリップさせてくれる山里に最も相応しい遊びだったといえるであろう。

9．山荘の建築

9－1．敷地

これまであげてきた山里の特性に対して山荘はどのような造りにされていたであろうか。

まず敷地は『作庭記』にあるように山の傾斜地にあるのが典型的で，付近には谷川が流れ，筧の水や滝の音が「あはれ」に聞こえ，山おろしの風が松林を吹き抜ける物寂しい山蔭にあった。

・思ひやれとふ人もなき山里の筧の水の心細さを　(後拾遺集，上東門院中将)

・山里の寂しき宿のすみかにも筧の水のとくるをぞ待つ　(千載集，聡子内親王)

・そのわたりは比叡，坂本，小野のわたり，音羽川近く，滝の音，水の声あはれに聞こゆる所なり　(宇津保物語，忠こそ，右大臣橘千蔭の隠棲する所)

・山の蔭は小暗き心ちするに（中略）山おろし心すごく，松の響き木深く聞こえわたされなどして　(源氏物語，夕霧，一条御息所の小野の山荘)

そして庭は簡素な柴垣で仕切られ，それに沿って山里の寂しさを癒すかのように卯の花・撫子・女郎花といった季節の花が植えられ，垣根の外には僅かな山田が広がり，鹿が佇んでいた。

・はかなき小柴垣も故あるさまにしなして，かりそめなれど，あてはかに住まひなし給へり　(源氏物語，夕霧，一条御息所の小野の山荘)

・垣ほに植ゑたる撫子もおもしろく，女郎花，桔梗など咲き始めたるに　(源氏物語，手習，小野の尼の山荘)

・いづれをか分きてとはまし山里の垣根つづきに咲ける卯の花(金葉集二度本，大蔵卿匡房)

・山里のそともの小田の苗代に岩間の水をせかぬ日ぞなき　(金葉集二度本，藤原隆資)

・山里の門田の稲のほのぼのと明くるもしらず月を見るかな　(金葉集二度本，中納言顕隆)

・鹿はたゞ籬のもとにたゝずみつゝ，山田の引板にもおどろかず，色濃き稲どもの中にまじ

りてうち鳴くも，愁へ顔なり　　（源氏物語，夕霧，一条御息所の小野の山荘）

ではこのような敷地にどのような山荘が建てられていたであろうか。

9－2．開放性

山荘は松林の中に身を隠すようにひっそりと建っていたが，傾斜地に建てられていたから眺めはよかった。そしてそれは廊のような開放的な造りにされていた。例えば源氏の須磨の山荘が「葦ふける廊めく屋」だったし（源氏物語，須磨），清少納言が賀茂に詣でた時に立ち寄った高階明順の山荘も「廊めき」たる造りだった（枕草子，95 段）。なお廊とは『和名類聚抄』によれば「保曽止乃」とあり，「殿下外屋」とある。「保曽止乃」とは細殿である。女房の局が並ぶ廂の間のように外部に面した細長い空間をさす。「殿下外屋」とは御殿の階下に造られた連絡用の吹き放ちの建築と考えられる。いずれも細長く，奥行の浅い空間である。それゆえ廊は開放的で，奥まで見通すことができる空間であった。すなわち源氏の須磨の「葦ふける廊めく屋」のように「御座所もあらはに見入れら」れ，細殿の場合でも格子や御簾を上げれば同様な空間となった。したがって廊は中に居ても端近に居るように感じられ，開放感はあるが女性にとっては身の隠し所のない空間であった。

・廊などほとりばみたらんに住ませたてまつらむも，飽かずいとほしく覚えて

（源氏物語，東屋）

「ほとりばむ」とは端近なことである。

さて山荘が開放的に造られたのは眺めのためであった。寝殿造のように母屋の周りを廂が囲う造りでは外の景色を間近に見ることができない。

しかも山荘は軒の出も浅くされていたようで，上部にも開かれており，紅葉や雪が舞い込み，月の光が射し込んできた。

・風のさと吹きたるに，木々の木末ほろほろと散りみだれて，御琴にふりかゝりたるやうに散りおほひたる　　（夜の寝覚，広沢の山荘）

御簾を巻き上げていくと，山は一面の紅葉で，管弦の遊びをしていると山風に紅葉がはらはらと琴の上に打ちかかる，という絵のような場面である。屋内に居ながら自然の只中で演奏しているような感じであろう。清少納言も細殿での体験ではあるが，次のように述べている。

・細殿，いみじうをかし，上の蔀あげたれば，風いみじう吹入れて，夏もいみじう涼し。冬は，雪あられなどの，風にたぐひて降り入りたるもいとをかし　　（枕草子，73 段）

・暁に格子妻戸をおしあけたれば，嵐のさと顔にしみたるこそ，いみじくをかしけれ。

（枕草子，188 段）

絵に描かれた自然ではなく，本物の自然が荒々しく侵入してくる驚きを「いみじうをかし」と繰り返している。

屋内に侵入してくる自然では月の光がもっとも「あはれ」深いものだった。

・月，隈なふ澄みわたりて，霧にも紛れずさし入りたり。浅はかなる廂の軒は，程もなき心ちすれば，月の顔に向ひたるやうなる，あやしうはしたなくて，紛らはし給へるもてなしなど，言はむ方なくなまめきたまへり。　（源氏物語，夕霧，一条御息所の小野の山荘）

・有明の月も出にければ，格子の隙どもより，ところどころ漏り入りたるが，いと心づくしなるに，思し侘びて，格子のもとのかき金を放ちて，押しやり給へれば，残りなうさし入りたるを，女君，いとゞ侘しうて，引き被き給へるを，とかく，ひきあらはしつゝ，見たてまつり給に　（狭衣物語，亀山の山荘）

・山里の月 ── しばの戸をあけながらにぞ伏しにけるさしいづる月のかげにまかせて　（中務集）

・絵に，山里なる女の，つらつえをつきて人待つかたかきて侍りしところに ── すみしれる月とみつるにことゝはん人待つよひの秋の山風　（源兼澄集）

いずれも月光がスポットライトのように女主人公を照らしている。

なお上の二首の歌は，訪れがなくなった男を待ち続ける女の悲劇的場面を詠んだものだが，こうした情景は絵画でも好まれ，屏風絵などに繰り返し描かれていた。清少納言はそうした場面の魅力を次のように述べている。

・九月二十日あまりのほど，長谷に詣でて，いとはかなき家にとまりたりしに，いと苦しくて，たゞ寝に寝いりぬ。夜ふけて，月の窓より洩りたりしに，人の臥したりしどもが衣が上に，白ふて映りなどしたりしこそ，いみじうあはれとおぼえしか。さやうなるおりぞ，人歌詠むかし。　（枕草子，211段）

夜更けに目が覚めると，有明の月が衣を白く照らしていた。彼女はそれを見て，こういう時こそ人は歌を詠むのだわ，と感動している。清少納言がこの時思い浮かべたのは次のような歌であったろう。

・今こんと言ひしばかりに長月の有明の月を待ちいでつるかな　（古今集，素性法師）

「またすぐに来るよ」という男の言葉を信じたばかりに，結婚の季節とされた長月の有明の月が出るまで虚しく待ち続けてきたことだ，という哀切な心情を詠んだものである。清少納言が泊まった家は「いとはかなき家」だったから奥行も軒の出も浅い建物だったのであろう。だから月光が家の中まで射しこんできて，「あはれ」な恋物語を連想したのであろう。

山荘の開放的な空間は，眺望によって心を晴れやかにしてくれるだけでなく（4.眺望参），室内に居ながら自然の只中に居るような体験を可能にし，深々と射し込む月光によって「あはれ」な恋物語の一場面を連想させる仕掛けともなっていた。

9－3．田舎家風

山荘の建築は，先に見た高階明順の山荘が「田舎だち，ことそぎて，（中略）ことさらに昔のことをうつし」ていたように（『枕草子，95段），「田舎家風で，簡素で，昔風」に造られていた。

まず田舎家風の具体像については「三間の茅屋，残生を送る」（本朝文粋，山家秋歌，紀納言）とか「茅茨，松柱三間」（本朝文粋，山亭起請，前中書王）とあるように，屋根は茅葺きで柱は松というのが定番になっていた。そして垣根も卯の花垣，柴垣，竹垣のような田舎家風のものにされていた。

・山里の夏の垣根はおぼつかな雲のゆかりにみゆる卯の花　（源順）

・山里は柴の囲ひのひまを粗み入りくるものは木の葉なりけり　（散木奇歌集，源俊頼）

・山里は竹のす垣に風さへて寝覚めがちなる冬ぞ來にける　（出観集，覚性法親王）

ではなぜ山荘は田舎家風にされたのか。それは，先に見たように山里が田舎遊びを愉しむ場所であり，その素朴さが珍しく「をかし」かったからであろう。

・所につけたる御住まひ，やう変りて，かゝる折りならずは，をかしうもありなまし

（源氏物語，須磨）

また山里が隠遁を模擬的に愉しむ場所だったからとも考えられる。すなわち隠遁とは官を辞して田舎へ帰ることだが，役人生活のことを「代耕」というように[24] 田舎で農耕に従事することが隠遁本来の姿であったから，隠遁のための山荘も農夫の住まいのように田舎家風にされたのではなかろうか。

また田舎家風の垣根と可憐な草花の取り合わせは山里にひっそりと住む女性を暗示しているようで「をかし」かったからでもあったろう。じっさい「かりそめなれど，あてはかに住まひ」なされた一条御息所の小野の山荘でも「はかなき小柴垣」に撫子が植えられ，秋風に揺れて「をかしう」見えていたし（源氏物語，手習），浮舟が隠れた洛北小野の山荘でも垣ほに撫子・女郎花・桔梗などが植えられ「をかしう」見られていた（源氏物語，手習）。ちなみに六条院北東の町のように京の邸の庭園でも山里風に造られることがあったが，ここでも「ことさらに」卯の花垣にされ，花橘・撫子・薔薇・くたんなどの花が植えられていた。

９－４．簡素

山荘は「ことそぎた」（簡素な）造りにされていた。簡素であることが山里の寂しさに堪えているようで「あはれ」だったからである。

・これは川面に，えもいはぬ松蔭に，何のいたはりもなく建てたる寝殿の事そぎたるさまも，おのづから山里のあはれを見せたり　（源氏物語，松風，大井の山荘）

・ここは又，さまことに，山里びたる網代屏風などの，ことさらに事そぎて，見所ある御しつらひ」　（源氏物語，椎本，八の宮の宇治の山荘）

「あはれ」とは美的なものや「か弱い」ものが何らかの不遇に堪えている姿に対して抱かれる共感的感情である。それゆえ寂しげな山里では豪華なものより簡素なものの方が「あはれ」であり，場所柄に相応しかったのである。

また山荘は

・松が崎の小山の色なども，さる巌ならねど秋の気色つきて，宮こに二なくと尽くしたる家居には，なをあはれも興も勝りてぞ見ゆるや(源氏物語，夕霧，一条御息所の小野の山荘)

とあるように，都の家より「あはれも興も勝りて」見えたが，それは自然美によってであり，その自然美を際立たせるためにも簡素なほうがよかったのである。

また山荘が簡素にされたのは，そこが隠遁遊びの場所でもあったからである。隠遁を説く老荘思想は作為や技巧を否定する。

山荘はまた源氏の桂殿や『夜の寝覚』の父入道の広沢の山荘のように仏道修行の場としても使われたが，仏教では住まいは夢のように儚い憂き世の仮の宿でしかないから「いと，仮なる草の庵におもひなし，事そぎた」(源氏物語，橋姫，宇治八の宮の山荘) 造りにされていたとも考えられる。

9－5．昔風

山荘の調度は敢えて昔風にされていた。

・馬の絵かきたる障子，網代屏風，みくりの簾，ことさらに昔のことをうつしたり

(枕草子，95段，高階明順の山荘)

・三稜草（みくり）の簾，網代屏風，黒柿の骨に朽葉の帷子かけたる几帳どもも，いとつきづきし　(蜻蛉日記，天禄二年，藤原師氏の山荘)

「馬の絵」は画題からしておそらく唐絵だろうが，十世紀中頃には既に倭絵にとって替わられ，流行遅れのものとなっていた[25]。また「網代屏風」は竹・檜の薄板・葦などを編んだ屏風で，『源氏物語』の京の邸では一例も見えず，宇治川べりの八の宮の山荘とその対岸に新造された因幡守の山荘にしか登場しない。つまり山里という田舎に相応しい調度だったが，田舎風とは時代遅れということでもあるから，昔風のものだったと考えられる。「三稜草（みくり）の簾」はどのような簾だったか不明だが，「みくり」は茎が三稜形で，長さが五，六尺の水辺の植物だから，これを編んだものであったろう。それゆえ整然と一定寸法に割った竹ひごを編んだ簾とは異なり，太さが不揃いで，素朴な昔風の印象を与えるものだったのではないかと思われる。また藤原師氏の山荘の黒柿の几帳も昔風のものだった。黒柿はかつては玉座にも用いられた最高級の銘木だったが，この頃には黒柿の骨に黄色い紙を貼った扇が「まづしきもの（みすぼらしいもの)」の代表のように言われているから（枕草子，176段)，黒柿の几帳も既に時代遅れのものになっていたと推測される。ちなみに『大鏡』に大宅世継という百九十歳の老人が登場するが，彼が持っていた黒柿製の扇も驚異的な古老ぶりを伝える小道具として使われている。

ではなぜ山荘の調度は昔風にされたのか。

一つの理由として，「古き物こそ，なつかしう」(源氏物語，梅枝) とあるように，休息のための山荘には使い慣れた物が持つ親しみやすさや安らぎが求められたからであろう。後世，兼好も「うちある調度も昔覚えて安らかなるこそ心にくしと見ゆれ」(徒然草，10段) と述べている[26]。

また昔風のものには「今めかしいもの」にはない落ち着きがあったからでもあろう。「今めかし」という言葉は「華やかな，あるいは陽気な感じのものを表現することが多い」とあり（『古語大辞典』小学館），「浅はかな面が強調されると，浮薄な落ち着きのない状態を示し」とある。つまり「今めかしいもの」には旧弊なものから解放された明るさ・華やかさがある反面，浮ついた浅はかな感じがあったわけで，華やかだが浮ついた京から山里へ遁れた者にとっては古色をおびて地味だが落ち着いた感じのものが好ましかったのであろう。

一方，「今めかしいもの」には奥ゆかしさも欠けていた。次の文は「今めかしいもの」を好む右大臣家の宴について述べたくだりである。

・そら薫もの，いとけぶたうくゆりて，衣のをとなひ，いと華やかにふるまひなして，心にくゝ奥まりたるけはひはたち遅れ，今めかしき事を好みたるわたりにて（源氏物語，花宴）

過剰で派手やかなものを好む右大臣家のやり方は品のよい奥ゆかしさに欠けていると批判的に述べたものである。今めかしいものが必ずしも劣っているわけではないが，表面的な派手さより奥深い趣こそ格式ある貴族に相応しいと考えられていたのであろう。

上記と関連するが，山荘に昔風の調度が用いられたのは，家の歴史の奥深さ，つまり家柄の古さ，由緒正しさを示したかったからでもあったろう。上坂信男氏は，貴族が古いものを評価する理由について「形成の基盤を父祖伝来の社会的地位に置く貴族社会であってみれば，物心両面にわたって，古来の儀式習慣，生活態度を踏襲あるいは尊重するのは当然のことで，ここに「古めかしさ」の美点である理由が見出される。」と述べている[27]。由緒正しさは貴族の権威や存在を支えてくれる根拠であった。それゆえ新興貴族は古い宮家の，たとえば故常陸宮邸の古めかしい家具を欲しがったし，他方，没落貴族である末摘花は古めかしいものを手放したくなかった。また明石の君が上京後の住まいを定める際，父入道の財力をもってすれば豪華な御殿を新築することなど容易なことだったが，敢えて母方の祖父中務宮が建てた大井の山荘に住むことにしたのも，その山荘が「ゆへあるさまの」山荘であり（源氏物語，松風），一族の由緒正しさを証してくれるものだったからであろう。

昔風のものは，その「うるはし」さも評価されていた。

・いと古体に馴れたるが昔やうにてうるはしき（源氏物語，蓬生）

・あやしうものうるはしう，さるべきことのおり過ぐさぬ古体の御心にて（源氏物語，行幸）

「蓬生」の引用文は「調度類がたいそう古めかしく，使い込まれており，うるはし」と言ったもの。「行幸」の引用文は「常陸の宮の御方（末摘花）は，おかしいほど，なにかにつけて几帳面で，行事なども決して疎かにしない古めかしい御性分」と言ったもの。いずれも「こたい」であることが「うるはし」とされている。「うるはし」とは，「①端麗である。つやつやと美しい。②きちんとしている。きちょうめんである。③心が誠実である。④交際がきちんと整って，りっぱである。親密である。⑤正式である。⑥正しい。まちがいがない。」（古語大辞典，小学館）などの意味をもつ。つまり，きちんと整っていて乱れたところがない美しさ，── 刺激的で個性的な面白さは

ないが，折り目正しい美である。それは目先の新しさを競う浮薄なやり方に対して批判的な，由緒ある貴族の矜持に相応しい美である。

要するに山荘が昔風にされたのは，都にはない安らぎや落ち着きを求めたからであり，また奥ゆかしさ，由緒正しさ，折り目正しさといった貴族らしい佇まいを求めたからでもあったろう。

なお山荘では「もてなし」も古風だった。八の宮の宇治の山荘を訪ねた薫は，どこからともなく現れた王孫めいた上品な老人たちから「さる方に古めきて，よしよしゝう」もてなされている(椎本)。また八の宮の古風な琴の演奏も「いと物深くおもしろ」かったという（椎本)。薫にとってそこは古代にタイムスリップしたような異世界であったろう。

9－6．荒廃

すべてというわけではないが，女性が独り住む所は「やや荒れている」のが定番だった。山里の場合も同様で，「山里に荒れたる宿を照らしつゝいくよへぬらん秋の月かげ」（小町集）というのがその典型的な情景であった。もっとも，荒れ果ててしまうと鳥獣か物のけの栖になってしまうので，ほどほどの荒れ具合がよかった。清少納言も次のようにも述べている。

・女のひとりすむ所は，いたくあばれて築地などある所も水草ゐ，庭なども蓬に茂りなどこそせねども，ところどころ砂子の中より青き草うち見え，さびしげなるこそあはれなれ
（枕草子，171段）

先に見たように山里の恋は秋とともに男の訪れが間遠になり，冬には遂に絶えてしまうのが型通りの筋書きだったが，やや荒れているのがよいというのは，そうした境遇に堪えている佳人を想わせ「あはれ」だったからであろう。

なおそうした場面のなかでは家の隙間から月光が洩れてくる情景が特に好まれた。

・山里はまばらの軒の茅間より洩りくる秋の夕月よかな　（出観集，覚性法親王）

・板間より月のもるをも見つるかな宿は荒らして住むべかりける　（詞華集，良暹）

清少納言も「あはれなるもの」として次のような例をあげている。

・荒れたる家の蓬ふかく，葎這ひたる庭に，月のくまなくあかくすみのぼりて見ゆる。また，さやうの荒れたる板間よりもりくる月　（枕草子一本，巻末26段）

だから実際にも敢えて家を荒らすこともあった。

・仁和のみかど，みこにおはしましける時，ふるの滝，御覧ぜむとておはしましけるみちに，遍昭が母の家にやどりたまへりける時に，庭を秋の野につくりて，おほむもの語りのついでに詠みたてまつりける ── 里は荒れて人はふりにし宿なれや庭もまがきも秋の野らなる
（古今集，僧正遍昭）

遍昭のこの歌は，親王だった頃の仁和の帝（光孝天皇）が布留の滝を見に行く途中，石上にあった遍昭の母の邸に立ち寄ることになったとき，庭を秋の野の風情にしてもてなしたことを詠んだものである。ちなみに仁和の帝は在俗時の遍昭が仕えた仁明天皇（嵯峨天皇の皇子）の第三皇子

である。また遍昭の母は嵯峨天皇の異母兄弟である良峰安世の未亡人である。つまり三人は旧知の間柄で，久方ぶりの対面だったのであろう。だから遍昭はできるだけの趣向をこらし，母を「山里の荒れた庭で秋草を眺めながら男の訪れを待ち続けた女」に譬えるという演出，あるいは「わが宿は道もなきまで荒れにけりつれなき人を待つとせしまに」（古今集，遍昭）といった趣向で迎えたのであろう。おそらく庭の門には葎を茂らせ，垣根には秋風に揺れる芒や可憐な草花を植え，簀子や遣水の辺りには紅葉が散らされていたと想像される[28]。山里の荒れた風情は物語の世界へ誘ってくれる舞台装置だったのである。

む す び

以上，平安貴族にとって山里が都という憂き世から逃避できる美的・異境的・救済的な別世界であったこと，そして山荘はそうした場所に相応しい造りにされていたことを指摘した。

なお山荘は主の出家後は修道場や寺院に改められることが多かった。例えば藤原道長の宇治殿は死後寺院となり，『源氏物語』の桂殿には予め御堂が造営され，後世の桂離宮にも園林堂が建てられた。この，信仰の場としての山里については本稿ではとりあげることができなかった。今後の課題としたい。

註

1）「やま」は地形としての山だけでなく，京に非ざる鄙をもさす。また山里が山荘の建築をもさしていたことは，例えば「仁和寺に花園といふ所に山里作りいだして通ひ給ひき」（今鏡，月のかくるゝ山のは）のような用例からも分かる。
2）西村亨『王朝びとの四季』講談社学術文庫，1979 年（三彩社，1972 年）
3）目崎徳衛「歌枕と山里」（『国文学　解釈と教材の研究，1976 年 6 月）
4）他に，笠井昌昭氏の「古代における『中央的なもの』と『地方的なもの』」（『日本思想史』第 3 号，ぺりかん社，1977 年）も，山里が貴族たちの抱いていた地方の名所への憧れを代償的に満たしてくれる場所だったことを指摘している。今西祐一郎氏も，平安時代の貴族たちが山里に惹かれたのは，彼らが帰属すべき本貫地としての「ゐなか」を喪失したからで，山里はその「ゐなか」の補償だったと述べられている（『國文学』1983 年 12 月，學燈社）。しかし平安貴族たちが山里に惹かれたのは，そこが単なる名所や本貫地としての田舎の代償だったからという理由だけではなかろう。
5）資料は，平安時代の物語，随筆，日記等については新日本古典文学大系（新大系本が刊行されていない場合は旧大系本）を用いた。和歌については『新編　国歌大観』（角川書店）と『私家集大成』Ⅰ，Ⅱ（明治書院）によった。
6）橋本峰雄『「うき世」の思想』講談社，1977 年
7）中国の隠遁趣味については大室幹雄『園林都市』（三省堂，1985 年）参照。
8）例えば『懐風藻』の中臣朝臣大島の「山斎」と題する詩に「宴飲山斎に遊び，遨遊野池に臨む」とある。
9）例えば長屋王の佐保の山家など（『懐風藻』「初春於左僕射長王宅讌」百済公和麻呂）
10）註 2）に同じ
11）平安時代の山里のこうしたイメージは桂離宮の明るいイメージとは異質である。
12）梅野きみ子『えんとその周辺』笠間書院，1979 年

13）山口直子「めづらし考」フェリス女学院大学日文大学院紀要11，2004年
14）「ベルツの日記」岩波書店，1979年
15）じっさいベルツは箱根の山荘を全山で最も景色の良い場所に建て，「ミハラシ」と名付けていた。
16）この山荘の建物はその後焼けているが，庭園は以後も受け継がれ，この記事の頃（1278年）には院の御所になっていた。
17）J. Appleton: The Experience of Landscape, John wilei & Sons, 1975
訳本は菅野弘久『風景の経験』法政大学出版会，2005年
18）R. カイヨア『遊びと人間』（清水幾太郎，霧生和夫訳，岩波書店，1970年）
19）『本朝無題詩』の詩はすべて本間洋一氏の注釈書『本朝無題詩』（新典社，1994年）によった。
20）小林昇氏は「わが国では隠逸は思想の上で知られたに過ぎなかった」と述べておられる。（『中国・日本における歴史観と隠逸思想』早稲田大学出版部，1983年）
21）註２）に同じ
22）新『日本古典文学大系』本では「なれば」とあるが，旧大系本のように「なれど」とあるのが正しいのではないか。川の辺りは危うげだけれど，ついつい酔いにまぎれて忘れてしまい，一日中そこでお過ごしになる，という意味であろう。
23）高橋文二「遊びのことば」（『古代文学講座』勉誠社，1994年）
24）陶淵明の「雑詩」其の八に「代耕は本より望みにあらず　業とする所は田桑に在り」とある。
25）家永三郎『上代倭絵全史』高桐書院，1946年
26）ボルノウも，安らかな住まいの条件として使い慣れた家具をあげている（大塚惠一他訳『人間と空間』せりか書房，1978年）。
27）上坂信男，湯本なぎさ『源氏物語の思惟』右文書院，1993年
28）末沢明子氏は「水辺の追想 ── 源氏物語の庭園」（福岡女学院大学紀要10，2000年2月）で，遣水が追憶・懐旧の場であり荒廃の場であったことを指摘されている。